HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『哺乳類科学』60 巻記念座談会ー創立メンバーから次世代へ伝えたいこと
Author(s)	阿部, 永; 藤巻, 祐蔵; 齊藤, 隆 他
Citation	哺乳類科学, 60(1), 129-137 https://doi.org/10.11238/mammalianscience.60.129
Issue Date	2020-02-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77026
Type	journal article
File Information	honyuruikagaku_60_129-137.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

哺乳類科学　60(1)：129–137，2020
©日本哺乳類学会

特集　哺乳類科学 60 巻記念特別寄稿

『哺乳類科学』60 巻記念座談会
―創立メンバーから次世代へ伝えたいこと

出席者：阿部　永（元学会長），藤巻裕蔵（帯広畜産大学名誉教授），
齊藤　隆（学会理事），大舘智志（編集委員長），佐藤喜和（編集幹事）

2019 年 11 月 16 日 15:00 ～ 17:00，雪
於 / 札幌市定山渓温泉鹿の湯 627 号室

60 巻記念座談会の趣旨

大舘：哺乳類科学は 2020 年 1 月に 60 巻 1 号を発行する予定です．発行して 60 回ということは人で言えば還暦にあたる大きな節目であります．これに先立ち昨年は，金子之史さんが日本哺乳類学会設立に関してのレビューの労作を著されています［哺乳類科学 58: 289–331 (2018)］．そして，この金子レポートに呼応する形で，本号（pp. 117–127）で日本哺乳類学会の母体の一つの哺乳類研究グループの創立メンバーである和田一雄さんに同グループの歴史についての見解を寄稿いただきました．今日は哺乳類研究グループの他の創立メンバー―つまり『哺乳類科学』の創刊メンバーでもある―の阿部永さん，藤巻裕蔵さんのお二人に，同グループ創立時の様子や哺乳類科学発行に至る経緯について，当時の活動を中心にお話を伺い，今後の哺乳類科学や日本哺乳類学会の発展への何らかのヒントをいただけたらと思います．ちなみに和田さんと金子さんは京都大学大学院理学研究科の出身，今日のお二方は北海道大学大学院農学研究科の出身ということになりますね．

聞き手役は学会理事の齊藤隆さんにお願いし，司会は現在の『哺乳類科学』編集長の大舘，記録は編集幹事の佐藤がつとめます．では，よろしくお願いします．

阿部・藤巻氏の個人史

齊藤：お集まり頂きありがとうございます．まずはざっくばらんに，自由に発言をいただければと思います．

創立の経緯や歴史について，客観的なところは金子さんの労作に譲るとして，今日は哺乳類研究グループの創立から発展と並行した形で，お二人が大学院生から研究者として独り立ちするあたりまでの過程についてのお話をお聞きしたいと思います．お二人は哺乳類学，鳥類学，動物学の分野でご活躍されましたが，現在の学生とは大分世代の差もあります．しかし，お二人の生い立ちから大学院生時代を経てプロの研究者にいたるまでのお話は，今の若手にも参考になる何かがあるのではないかと思います．それをこの機会に是非記録して，世代を超えて伝えたいと考えています．

まずは，お二人のお年と大学入学年を教えてください．

阿部：昭和 8（1933）年生まれ，現在は 86 才，昭和 27（1952）年大学入学です．

藤巻：阿部さんより 5 年下で現在 80 才，昭和 32（1957）年大学入学です．

齊藤：調べましたところ，阿部さんや藤巻さんが入学した当時の大学進学率は約 15%ということでした．今や 50%を超え，大学の大衆化が進んだと言えると思います．当時，大学に進む人は，お金持ちということでしょうか？それとも特に頭のいい人ということなんでしょうか？

阿部：僕は徳島県で生まれ育ったのですが，親父が中学教師をしていて，植物の研究が趣味で，同時に陸産貝類の収集もしていました．だから親父は四国の植物の標本を大量に作っていました．そのため，東大の本田（正次）先生，高知県出身の牧野（富太郎）先生，広島大学の豪傑で有名な堀川（芳雄）先生，京大で貝類研究をしてい

た黒田徳米先生などが，家にしょっちゅう来て泊まったりして，そのときにいろいろな話を聞いてました．僕は子どもの頃から，昆虫が大好きでしたが，だんだんと鳥も好きになった．そんなこと言っていたら，黒田先生が泊まりに来た時に下村兼史さんの鳥の図鑑をくれて，さらに鳥が好きになって，鳥を空気銃で撃ったり霞網でとったりして，剥製をたくさん作ってました．

齊藤：その剥製をつくる，というのは誰からならったのですか？

阿部：剥製の製作は親父に技術をならいました（中学生当時）．このときに作成した標本は，徳島県立博物館に入っていて，今でもあります．もちろんラベルもきちんと付いています．生物標本の基本的な扱いは親父の影響で，家庭環境の中で自然に身についていました．昆虫も鳥も，捕まえてきた標本にはラベルを付けること，採集データを付けることは僕にとっては当たり前の常識になっていました．当時は鳥の研究と哺乳類の研究を同時にやっている人が多かったです．犬飼（哲夫）さん（北大教授）も幅広くやっていたね．哺乳類の研究をやろうと決めたのは，北大に入ってからです．それまでは単に動物を集めるのが好きだった．

藤巻：僕も小さい頃から動物は好きだった．大島正満の『動物物語』（1949．妙義出版社）が好きだった．金魚を飼ったりもしていた．

齊藤：ところで藤巻さんはどこのご出身でしたか？

藤巻：東京生まれで，両国橋の近くで育った．父親は職人だった．知り合いの医者からコマドリをもらって飼育したので鳥に興味を持ちはじめた．墨田川でユリカモメとかも見ていたね．中学２年から日本野鳥の会に入り，あちこち鳥を見に行ってました．高校時代に鳥学会に入り，山階鳥類研究所の例会にも参加していた．その時に北海道に行った人の話をきいて，僕も行きたいな，と思った．ところがうちの親父は，職人には学問は入らないと言って，大学進学は不要と考えていた．そんな父への反発心もあり，家を離れたくて，ともかく大学に行きたかった．そんな理由で北大に入った．

齊藤：私の北海道大学入学時（1974 年）の１年間の学費が３万６千円，入学金が１万２千円と，ひと月に換算すると高校に毎月納めていた金額よりも安かった．うち

図 1．60 巻記念対談中の参加者．『哺乳類科学』創刊メンバーの阿部　永（左から２番目）と藤巻裕蔵（右から２番目）に話を聞きだす齊藤　隆（左端）と記録している佐藤喜和（右端）（敬称略）．

もそうだったけれど，私立大はだめでも国立大は OK という家庭は多かったですね．

藤巻：私の家庭もそんな感じで，国立なら，という条件で父親の進学許可を得た．

齊藤：阿部さんの入学の経緯はどうです？

阿部：僕は子供の頃から家に学者が出入りしていたので，大学にいくのが当たり前と思っていた．入学前年の９月に全国校長会が北海道であって，それに親父が参加した．そして帰ってきた親父が，北大はいいぞ，と言ったんです．最初は出入りしていた先生たちの影響や徳島からも近いことから，京都大学を目指そうと思ってたんだけど，たまたまこの父親の発言で志望を北海道大学に変えた．当時は北大も東京で受験できた．だから受かってから初めて北海道にきた．

藤巻：僕のときも東京で受験でしたよ．

齊藤・大舘（共に北大教員）：おお，それは受験生にとって受けやすいシステムだ！

阿部：当時，札幌駅は木造で，円山公園にはクマが出ると言われていた．南は学芸大学前（現中央図書館前）から北は北 18 条まで（路面）電車が走っていた．その後，北 33 条くらいまで路線が伸びた．北大構内には建物は少なく，理学部・農学部はあったが，その奥（今の工学部から北側）は恵迪寮くらいでほかは何も建物はなかっ

た．北 18 条より北は草原や第二牧場となっていて，カッコウやシマフクロウもいた．

先輩の芳賀（良一）さん（のちの帯広畜産大学教授）から聞いた話だけど，1940 年代に彼が理学部の横のサクシュコトニ川でシマフクロウを鉄砲で撃ったことがあった．撃った直後にバンと理学部の窓が開いて，牧野（佐次郎）さん（北大理学部教授）が，「今撃ったやつは誰だ！それは俺が撃つやつだ！！」と叫んだそうだよ（一同爆笑）．その時捕獲したシマフクロウは現在剥製標本として北大植物園の標本庫に収蔵されています．

当時，農学部の廊下の棚の上にはいつも猟銃が裸で置いてあって，それで僕も恵迪寮の森の中などのキャンパス内で鳥を撃っていた．犬飼さんは，調査に行くときは必ず鉄砲を持って行っていたね．当時は捕獲許可も必要なかったのでどこでも撃っていました．

藤巻：1960 年代前半までは，ほとんど狩猟法なんて守られていなかった．なんせ営林署の職員自身が密猟していたんですから．畜大（帯広畜産大学）にも古いバンビの標本がたくさんあったし，一般にも数多く出回っていた．でも当時はシカなんてあまりいなかった．つまり，おそらくはメスを密猟して胎子をとって剥製にしていたんですね．食糧事情も悪かったので，このようにシカを密猟するのは普通のことだったと思う．だから密猟による個体群へのプレシャーはかなり高かったんじゃないかな？

齊藤：なるほど．当時シカが増えなかった理由の一つは密猟であった可能性もありますね．

ところでお二人は，学部から大学院に進学する際にはどんなモーティベーションを持って進学されたのでしょうか？

藤巻：経済的な問題などもあって 4 年の時にかなり迷った．私の場合はこれといった目的はなくて，すぐ就職する気がなく，なんとなく試験を受けて進学しました．

阿部：僕の場合は当然のように進学した．というのは，子供のころから，いつも周りに大学の先生がいる環境で育ったから，大学院に行くのは当たり前だった．

齊藤：大学院に進むことは研究者になることと同じでしたか？

藤巻：研究者になろうとは強く思っていなかったけど，博士課程に入ってからは強く思うようになった．ちょうど京都大学が大学院白書を作成し，北大もそれに倣って作っている途中で，大学の研究における院生の役割や奨学金の問題などに結びつけていました．そして院生も研究者なのだという位置づけ，意識，機運が盛り上がっているところだったので，やがて自分も研究者になるという意識が芽生えてきた．

阿部：さっきもいったように，僕は子どもの頃から研究者になるのが当たり前と思っていたので，家に来ていた先生たちと同じような研究者になれればいいな，と思っていた．

哺乳類研究グループの立ち上げ

齊藤：院生時代に徐々に研究者としてのプロ意識が高まっていく人が多いのでしょうね．二人が所属していた北大農学部応用動物学教室では，自由で放任という雰囲気があり，研究テーマの決定からフィールドワーク，論文執筆までなんでも自分でやりなさい，という面が強かったと思いますが，いかがです？

藤巻：学部 4 年まで犬飼（哲夫）さんが指導教授でしたが，彼は研究テーマを与えず，逆になにをやっても文句を言わない人だった．私は鳥が好きだったのですが，彼から「鳥じゃ食えないよ」と言われて卒論ではネズミをやることにした．しかし犬飼さんからは特に何も言われず，ネズミで具体的に何を研究するかも指導されなかったです．4 年の時，たまたま哺乳類研究グループの発足が京都であって，創立に立ち会ったので，どうにかネズミの研究を進めることができた．

阿部：1950 年代に経済成長が始まり，木材需要が高まり拡大造林がはじまると，北海道ではエゾヤチネズミが，本州ではハタネズミが大発生し，森林に大食害を与えた．そんな経緯で野鼠被害対策の一環として，ネズミ研究グループが発足した．造林地の周囲には防鼠溝（幅 40 cm，深さ 45 cm の溝で所々にトタン板製の墜落缶が設置されている堀のようなもの）が掘られ，墜落缶に大量のネズミやトガリネズミが落ちて死んでいた．ネズミ研究グループの発足当時はエゾヤチネズミの研究者が大勢いたんだけど，当時食虫類（モグラ科，トガリネズミ科）をやっている人は誰もいなかった．無数にあったトガリネズミ類の標本などは種名もわからないまま，そのまま放置されていた．当時は老齢個体や個体変異を別種として

記載するなど，ずいぶん乱暴な分類をしていた．誰も食虫類のことをよく知らなかったし，専門で研究している人もいなかった．そこで自分で食虫類をやろうかと思いたち，大学院の研究テーマにした．

大舘：ちょうど今のシカの農林業被害問題とおなじような状況だったのですね．

阿部：まさにそうだよ．

齊藤：当時みなさんが研究を始めるには，ネズミ研究グループは重要な役割を果たしていたのでしょうか？金子リポート［哺乳類科学 58: 289–331 (2018)］や和田リポート（本号 pp. 117–127）にも書いてありますが，これは生物学的・生態学的な理論を重視したグループだったのでしょうか？またネズミ研究グループの発足当時の志はどのあたりにあったでしょうか？

阿部：昭和 26（1951）年に徳田（御稔）さん（京大助教授）の『進化論』（日本科学社）が出て，その本は哺乳類研究グループ（と前身のネズミ研究グループ）では影響力があった．今のような分子系統学的な情報が無い中で，形態だけで進化に関する議論を良くやっていた．そのうちにネズミ研究グループのメンバーの研究対象種が広がって哺乳類研究グループと改称した（ネズミ研究グループから哺乳類研究グループへの発展については，本号 pp. 117–127 を参照）．哺乳類研究グループができた時も，そうした進化に関する議論をよくしていた．哺乳類研究グループの最初の志は，みんなで議論することを重視した．あとはね，理論をかなり考慮していた．

齊藤：私の解釈としては，哺乳類研究グループは従来の学会とは違うものを求められていたのではないかと思います．従来の生物学や動物学とは違う，記載だけに留まらない，記載に基づくが理論的背景のある研究，そしてわくわくする生物学を同じ世代の若い仲間が集まって作っていこうとした，という感じではなかったでしょうか？

藤巻：うーん，そのような理論云々と言いだしたのは 2 年目以降かもしれない．

阿部：哺乳類研究グループでは常にそうした議論をしていた．大学内だけでは白熱した議論はあまり進まなかった．哺乳類研究グループは，そういう意味で創造的だったと思う．グループ全体としては，哺乳類進化や生態学に関する理論化は十分にはできなかったけど，メンバーの個々人の中ではそうした考えが育っていった．そういった意味で哺乳類研究グループは我々若者にとっては重要な場だった．

齊藤：似たような流れは当時の他の世界にもあった．親分が音頭をとるのではなく，小さな人数で志を共有するような動きがあったかと思います．

金子リポートでは，戦後，社会全体が全体主義的統制から解放されていく中で，学界では小さなグループの重要性が意識され始めた，というようなことが書いてありますね．

藤巻：自分の知識や経験だけでは足りないところを補うために，小さなグループが必要とされたのでは？北大応用動物学教室の中にも，生態学研究のグループができた．そして，よそから先生を呼んできて講義してもらったりしながら学んでいった．自分たちが求めた結果に作ったのが哺乳類研究グループではなかったか．創立当時は，グループには特にリーダーというのはいなかった．そしてみんなが議論に参加していた．

阿部：そう，特にリーダーというのはいなかったね．哺乳類研究グループは，当初は北大，九州大，信州大，京大の 4 大学の学生を中心になりたっていた．最初のメンバーは 16 名．九大の内田（照章）さんだけが職持ち（当時助手），他はみんな学生だった．九大教授であった平岩（馨邦）さんの名前も『哺乳類科学』の創刊号にでているけど，メンバーではなかったし実際にはほとんど係わっていない．徳田（御稔）さんも顔を出して話はしていたけど，グループの方針に口出しはしなかった．

このグループは野外調査や野外活動などの技術的な相談をする場，というよりも議論をするための場である，という意識が共通認識としてあった．

齊藤：こういう若者が中心となって作られたグループが成功した例は，最近はあまりないと思います．少し前ならば，北大ヒグマ研究グループ，帯広畜産大学ゼニガタアザラシ研究グループがある．彼らは，なんだかんだいったって立派だよ．実際に多くの研究者がでているもん．こうした若い人たちの自発的集団で人が育った例は最近はないかも知れないね．

大舘・佐藤（二人とも北大クマ研出身）：うーん！？ふ

ふふ（自嘲，苦笑）.

齊藤：哺乳類学研究グループでは，各自の考え方を披露して議論し合った, そのこと自体も楽しく, 刺激的であった．また頭の中で考えただけでは漠然としてまとまらない時でも，口に出して話したら考えがまとまった，ということも確かにある．哺乳類学研究グループはこのような理想的な自己教育の場としてその役割があったかと思うんです．小まとめとして，哺乳類学研究グループは若者たちの議論の場としての重要性があったと結論付けられると思います.

藤巻:ところで，徳田さんの書いたこと（「2 つの遺伝学」や「現代の進化論」などの著作）は攻撃的で厳しかったけれど，実際の彼の人柄はそんなことなくて，若者の話を良く聞いてくれて，全くえらぶっていなかった．彼の本だけ読んで厳しく批判されているけど，実際は柔軟性のある人間だった思います.

阿部：徳田さん，僕もよく相談して話を聞いてもらったなあ．徳田さんには哺乳類研究グループの相談役をしてもらっていたね．あと太田嘉四夫さん（北大農学部）も顧問役だった.

大舘：もうすでに 1 時間以上経っています．お茶でも飲んでちょっと小休憩の後に再開しましょう.

（この間，オフレコ話題で一同大いに盛り上がる）

哺乳類研究グループと哺乳類科学の存在意義

齊藤：さて，再開しましょう.

阿部さん，藤巻さんの個人史から始めて，哺乳類研究グループの創立当時について，若者達が研究者としての意識を固めていく過程において，このグループの重要性と役割はわかりました．哺乳類研究グループには，教授のいいなりではなく, 自分で何か新しいものを作るんだ，という学生達が集まってきた．なんで当時の学生にはそういうことができたのでしょうか？

藤巻：なぜそういうことができたかって？僕は自分の研究の柱になるものを自分で獲得したい，という思いがあって研究グループに参加していた．グループでは毎年の集まりがあった．それが大いに刺激になっていた.

齊藤：研究者の個々の人の繋がりと議論を交わす場について，自分たちの世代では大学院の研究室（北大農学部応用動物学教室）の中で，そういう関係を作ることができた．しかし哺乳類研究グループ創立当時（1960 年代前半）においては，各大学の研究室内だけではそれができず，議論するつながりを求める人が集まって大学を横断する形での哺乳類研究グループ（ネズミ研究グループ）ができた，ということですか？

阿部：いや，というより，大学内ではそれぞれで議論はしていたけど，大学の枠を超えて人たちが集まると，自分たちだけでは考えつきもしなかった意見も出てきて，一段階上がったような実感を得ることができた.

齊藤：1961 年にそれが『哺乳類科学』という雑誌の創刊に結びついていく．ネズミ研究グループ（のちの哺乳類研究グループ）を設立した段階でこの雑誌の創刊は必然だったと思います．議論することと，それを活字に残すことは同じではないが，議論した過程や結果を記録することは大きな意味があった.

一方で，議論を活字として残すことの意味，重要性はわかるが，発行を続けることはだんだん大変になっていく．創刊当初は勢いがあるんだけど．発行を重ねると，次第に発行すること自体が目的になり，義務的になっていく．また年次集会のシンポジウムのテーマもマンネリ化していく．こういうことは世間では良くあることで，避けられない運命ですね．哺乳類研究グループのこの時期を和田さんは「滞留期」と言ってますね（本号 pp. 117–127）.

藤巻：1975 年 10 月に，私は道立林試から畜大に移り，研究対象を鳥に変えた．その後，哺乳類研究に直接には関わっていません．和田さんの定義する哺乳類研究グループの「草創期」から「発展期」まで『哺乳類科学』と関わっていたということになりますね．ちょうどグループ内で哺乳類学の入門書を作ろう，というころまではいました．当時，イギリスやアメリカでも哺乳動物学の入門書が出ていた．そのような状況のなかで日本でもそうしたものが必要ではないか，ということになった．僕も提案者の 1 人です．当時はそういう入門書の類は日本にはなかった．教科書的なものは，今泉（吉典）さんの分類中心の『原色日本哺乳類図鑑』（1960，保育社）ぐらいしかなかった.

齊藤：和田さんのリポートを読んでみると，入門書を作

ろうという機運はあったが，やがてそれも立ち消えになっていったようですね．その理由を考えてみると，創立メンバーがみんな1人前の研究者に成長してしまい，いろんな知識や技術を得てしまったので，入門書が必要でなくなってしまったからではないか，と思います．これって，すごく人間的だと思う．自分たちにとって必要だから入門書を作ろうと思ったが，自分たちが入門者ではなくなり，もともとの目的を失ったための必然だったと思います．このことは，後の世代の人間にとってはとても残念なことなんだけれど．

哺乳類研究グループの活動は，それぞれの若者だったメンバーの研究者としての成長とシンクロして変化していったということだと思います．グループ自体が成長してしまい，新しく入ってきた若手には優しくはなかった．自分は1980年代くらいから哺乳類学の勉強を始めたのですが，体系的に日本の哺乳類の研究に関する入門書があったら良いのにと思っていました．私の場合は阿部さんが近くにいてくださったから良かった．それでもいろいろ不自由だったから，入門書を作ってください，と哺乳類研究グループの先輩たちに言ったけど，けんもほろろの答えしか返ってこなかった．それでいつかは入門書をつくってやるぞという思いがずっとあり，2005年に国際哺乳類学会（IMC9）を札幌でやって，出版するための資金調達のめどができた．そうしたら大舘くんも同じ思いであることがわかったので，一気に実現化に向けて動きだし，『The Wild Mammals of Japan』（2009, 松香堂）という形で結実させることができた．

藤巻：我々の場合は，入門書の発行についての議論を始めたら，あるひとが「なぜ入門書が必要なのか？」とそもそも論を朝までふっかけてきて，気分が萎えてしまった，というのも理由の一つかもしれないね．

齊藤：話を戻しますと，入門書の発行という発想が出てきたこと自体が，若者が中心であった哺乳類研究グループの特徴を示していると思います．

大舘：私が1984年に北大農学部応用動物学教室に学部の2年生として入った頃は，ゼミなどで自分の考えを進んで発表して，それについて学生から教官までが対等に議論する，というような伝統がまだ強くありました．こういった自発的な議論をもとに，研究者として成長し自立していくすべを学んだ，と思います．

齊藤：当時の応用動物学教室では，講義などで学生に何かを教えるのではなく，学生が自主的に知識や技術を得て育っていく，という放任主義的な教育だった．でも，ゼミは学部生から教授まで全員が参加して，とにかくいろんな議論が行われた．ゼミこそが全てのような環境だった．

大舘：大学院でも講義などまるでなかったですよね．自分が北大の教員になってしばらくして大学院改革があって，それから大学院でキチンとした講義をやるようになりました．今やそれが北大では当たり前の状況なんです．（教授である）齊藤さんのほうがよくおわかりと思いますけど，当時とは教育のやりかたが根本から違う．だから急に私に「教えろ」といわれても，自分ではそういう教育や指導法を受けてこなかったから，なかなか教え方がわからないで困りました．私立大の佐藤くん（酪農学園大教授）の場合は，講義の負担や学生へのキチンとした指導は普通なんだとおもいますけど．ただ，今の大学での教育のやりかたが，研究者を育てるためにベストなのかは疑問です．また学生にとっても自分からなにかを求める前に教員の側からいろいろとテーマなどがふってくる．状況が違うのですね．私の学生の時ぐらいまでは，自分で動かなければなにもわからなかったので，自分たちで求めていくしかなかった．哺乳類研究グループの創立当時の雰囲気が私の学生の頃までは濃厚に残っていたということですね．

あっ，なるほど！私自身の研究の進め方や，『The Wild Mammals of Japan』の編集を引き受けた道筋というのは，哺乳類研究グループが持っていた発想と教育システムの流れの中で，阿部さん，藤巻さんの時代から，齊藤さんの時代を経て，無意識的に自然と受け継がれて来たものなんですね．能力も知名度もない私がどうしてあんな大それたことをやったのか，そしてそれをなぜ周りが受け入れてくれたのか，今やっとわかりました．とても個人的なんですが，自分の立ち位置を学界の流れのなかで客観的に位置づけるという意味で，今日の座談会をやったかいがありました．

若い人に引き継いでもらいたいもの

齊藤：自分としては学問をする上で，いい環境にいたのかなと思う．

『哺乳類科学』でなにかを活字にすることに意味があるが，ルーチンワーク化して編集活動への負担も出てくる．また哺乳類研究グループの草創期のメンバーにとっても，研究者として成熟するにつれ，『哺乳類科学』の

学問的・教育的な必要性が低くなっていく．

それでも私にとっては『哺乳類科学』の存在は，個人的にとてもありがたかった．『哺乳類科学』から私が得たものをいくつかあげてみます．まずは博士課程の頃，阿部さんが『哺乳類科学』にエキノコックスの論文を書いた時，投稿前に原稿見せてもらって，コメントさせてもらった．エキノコックスが土着なのか道東からの拡大なのかという議論の論文のことです［哺乳類科学 26: 1–9（1986）］．これが私にとっては初めての査読のような経験だった．論文自体はデータもなく，科学的な根拠は薄かったけど，ストーリーがとても面白く，「こういう論文もありなんだ」と学ばせてもらいました．また，前川（光司）さん（のちの北大北方生物圏フィールド科学センター教授）に勧められて個体数変動についての総説を書いて『哺乳類科学』に載せてもらった［哺乳類科学 23: 1–10（1983），24: 1–20（1984）］．これはものすごく励みになりましたね．

阿部：『哺乳類科学』は，若者の意見を載せ，そしてそれについて反論や批判をする，というのがもっとも重要な役目だった．

大舘：今の『哺乳類科学』は一般の学会誌のような投稿が多いですね．また議論というよりも報告や事例，技術的なハウツーものが多い．また科学論文のフォーマットになっていない未熟な原稿も数多く投稿されてきます．

齊藤：しかし，基本的に提出されたものはリジェクトせずに，面白いものを載せていった方がいいんじゃないの？自由な議論や試論，情報交換の場として機能させることが創刊の理由なんだし．若者の意見を載せて，他者の反応をみる．一方通行でないところがミソ．仮説の段階や試論からの未熟な論文でも良いと思う．

大舘：まあ，確かにそうですね．しかし，一応，投稿規定や査読もあるので，すべて受け入れるというわけには行きませんが．そういった意味で，本号で，和田さんに哺乳類研究グループと『哺乳類科学』についての，まさに彼の私見の寄稿をお願いしたのです．あれを読んで，若い人たちがなにを感じるか，反応が楽しみです．

齊藤：研究をする上で，事実の記載は必要不可欠で重要だけど，それだけじゃつまらない．研究成果には，もっと生物学的意味がある，または理論的な広がりがあるまとめ方があるはず．事実だけでなく，事実をどう越えて研究を進めていくかが重要なのではないか思う．

哺乳類研究グループは，グループとしての成果は残せていないかもしれないが，数多くの研究者を育てた．哺乳類研究グループは，人を育てる教育機関のような役割をしていたと思う．そして『哺乳類科学』は良識・良心のもと，自由な発言が許される場として機能していた．創刊当初は，メンバー同士の互いの信頼関係があり，査読なしで原稿が掲載されていた．今の『哺乳類科学』でも，個人攻撃以外だったら，何でも載せていく方針が良いのでは？

大舘：確かにそういうのが理想ですが，哺乳類研究グループ（ネズミ研究グループ）の発足当時は 4 つの大学からの 16 名からなっていたけど，今や会員は 1200 名近くもいます．お互いに知らない会員同士が多く，『哺乳類科学』への投稿になんらかの規制があるのは仕方がないと思います．何でもアリだと，制御不能で機能不全になってしまう．

齊藤：たしかに議論ができる最大の人数というのはあると思う．50 人ぐらいが議論できる単位としては最大かな．それを超えれば，ひとまとまりの議論はできない．だけど，大きな集団でも，小さなグループを作って，そこの中での議論をネットワークで繋げていけば良いのでは？

大舘：細分化もいいけど，話題がローカルになりすぎると，自分の専門だけに特化してしまい全体が見えなくなってしまう危険性がある．だから小さいグループに細かくなると同時に横にもつながらないと，学会の存在意義がうすれてしまう．

齊藤：だからそれらの細分化した小さなグループをつなぐ企画が求められると思う．『哺乳類科学』ならそれが可能かもしれないし，それが今における存在意義かもしれない．

藤巻：『哺乳類科学』は，今は英語にできないような和文の論文を載せるだけの雑誌になっているということかな？

齊藤：今は，若手の側もそういう意識を持ってしまっているのではないでしょうかね．だから我々が「それで満足していいのか？」っていう雰囲気を作ることが重要なのかもしれない．日本哺乳類学会は普通の学会になってしまったけど，まだ他の学会よりはかつての哺乳類研究

グループがもっていた自由で自主的な雰囲気が残っているのではないか？他の多くの学会はもっと事務的な集まりになっています．日本哺乳類学会では，そうではなくて，学会で互いの意見をぶつけ合っていくような場を提供したい．

大舘：例えば日本生態学会は，会員数は 4,000 名程度と大きくなりすぎたけど，その中で，興味の共通している小さなグループで活発に集会などを行なっていて，必要に応じて横のつながりができているような感じです．大会では，まさに様々な分野の専門家が一同に会するので，専門外の知識を得たりコネをつくる良い機会になっていると思う．

齊藤：だけど生態学会の一回の大会の参加者だけでも 2,000 人の規模だよ．たしかに情報は得やすいが，いかんせん巨大すぎる．その点，日本哺乳類学会はまだ，学会としてまとまりをつけることができる程度の規模だと思う．

藤巻：哺乳類学会の自由集会は口頭発表の延長になってしまったのではないかな？

齊藤：おっしゃるとおりです．昔は海獣談話会などのグループが活発に集会をやっていた．哺乳類研究グループの自由集会では，ある話題について高い問題意識をもっている人たちが話し合って議論する，という形を作っていた．人を育てるためにも，こういうふうに今後もやっていこうよ．

阿部：自由集会でも話をした後に，それをもとに議論をするような，そんな機会を作ればいいのではないかな．

齊藤：それには小さな規模のグループでやればいいんだ．

大舘：前編集長の安田（雅俊）さんの時に，自由集会の報告は，すでに要旨集で公表されているので，『哺乳類科学』への義務的な報告は編集作業や予算上の大きな負担があるために廃止にした．たしかに『哺乳類科学』での自由集会の義務的な報告書は，集会開催の自己完結的なアリバイづくりに使われてきた感があったのも否めないですね．私たちが編集をやるようになってからは，義務的報告の代わりに自由集会の論議をもとにして発展的に論を進める「特集」という形にして公開するように奨励しています．

齊藤：編集長権限を強くして，もっと甘い査読で多くの論文を掲載したら？学会事務センターが破綻した直後と比べると予算的に余裕があるので，印刷費で学会の財政が圧迫される状況ではないのだし．

大舘：そんなことも考えて私が編集長になってから，『哺乳類科学』にフィールド・ノートというコーナーも試験的に作ってみました．

齊藤：『哺乳類科学』は，学会誌か機関誌かという論議もありますね．精神論として，『哺乳類科学』ではおおらかで面白いことを言って欲しい．編集長が面白いと思えばそれでいいんじゃないか．

大舘：はい，面白いものは載せていきたいと思います．私は機関誌として考えています．『哺乳類科学』が人を育てることを期待したいです．もともと，この雑誌は創立メンバーが育ってきた過程で生まれたものですからね．

齊藤：キーワードは，人を育てる『哺乳類科学』．思い切ったことをしてもよいのでは？

大舘：まあ，私はもう任期ですから．

藤巻：金子リポートでは，哺乳類研究グループは日本哺乳動物学会の一部とされています［哺乳類科学 58: 289–331（2018）］．でも実際はそういう認識は持っていなった．和田リポートでは，日本の哺乳類研究には，日本哺乳動物学会系のグループと，若手の哺乳類研究グループ系の 2 つの流れがあったが，後者のメンバーの間では自分たちは日本哺乳動物学会の下部組織であるという意識はなかった，と書かれています（本号 pp. 117–127）．私もそう思います．自分の場合は，モモンガなどの研究論文は哺乳動物学会の『哺乳動物学雑誌』に，意見や議論は哺乳類研究グループの『哺乳類科学』に書いてきた．2 つの組織の役割は私にとっては違っていた．だから，1987 年に 2 つの組織が合併したときには意外に思った．

齊藤：機関誌と学術誌，この 2 つをきっちりとわけられなくても，それぞれの目的の違いの精神は引き継いでいきたい．今の日本哺乳類学会には学術誌として『Mammal Study』（『哺乳動物学雑誌』の後継誌）がありますので，『哺乳類科学』は機関誌としての役割があるのではないでしょうか．

哺乳類研究グループは成長して，創成期のメンバーも

研究者として成熟してしまい，学びの場を探すというモーティベーションが薄れて，それに合わせるように個人としての活動の効率の上から日本哺乳動物学会との合併の発想がでてきたのではないか．和田さんは，哺乳類研究グループは消滅した，といっているけどそんなことはないと思います．哺乳類研究グループの精神の一部は受け継がれているし，受け継ぐべきものだと思います．

阿部：そうだね．消滅はしていない．

大舘：わたしもそう思います．少なくとも一部の研究者の間では，哺乳類研究グループの活動精神はきちんと受け継がれているとおもいますよ．

藤巻：あと『哺乳類科学』や日本哺乳類学会へ言いたいこととして，現在は仮説検証型の研究が主流になっているけど，その理論は外国からの借り物が多いので，独自なアイディアも出して欲しい．また研究も技術を追求するものが多くなっている気がするので，もっとベーシックな学問的な問いを大事にする研究が増えた方がいいと思います．

佐藤：今後，編集委員会企画で，挑戦的な，面白い企画もやれたらいいですね．

大舘：ということで，話題は延々と尽きそうもありませんが，エンドレスになりますのでこのあたりでお開きとしたいと思います．

僭越ながら，『哺乳類科学』創立メンバーであるお二方から，若手やこれから哺乳類学を目指すひとへのメッセージを要約しますと，自由で自発的な発想と，活発な論議を期待したい，ということですね．またこの座談会記録を読んだ方には，これを，「昔はよかった」的な単なる回顧録ととらえていただきたくはないですね．日本哺乳類学会や『哺乳類科学』の根本理念が語られていますので，皆さんにはご自身の活動への参考にしていただけたらと思います．

さて座談会にご参加の皆さん，楽しくてためになる貴重なお話をありがとうございました．

一同：ありがとうございました．

（参加者全員の合意のもと，会話の言葉遣いを変えたり，事実関係を確かめて年や単語を置き換えたり，部分的に編集した箇所もあることをご承知ねがいます）

（まとめ：佐藤喜和・齊藤　隆・大舘智志）